

<メディアウォッチ>

事故後最高の放射線量にも説明責任の姿勢欠く東電と追及しない記者たち

上出 義樹

東京電力福島第一原発で8月1日、事故後最高値の毎時10シーベルト（1万³シーベルト）以上の放射線量が測定され、新聞やテレビが大きく報道。朝日新聞と東京新聞は2日付朝刊の1面トップで扱った。

1号機と2号機間の主排気筒で測定され、1日夕方に開かれた政府・東電の共同記者会見で東電が発表した。東電によると、3月12、13日の事故発生直後に原子炉格納容器の圧力を下げるためのベント（排気措置）が行われた際、高濃度の放射性物質が流れ込み、それが内部にたまっている可能性が高いという。

筆者はインターネットでこの会見の録画を見たが、東電の発表の仕方に問題があるのに、それを記者たちがきちんと追求していないのが気になった。

致死量上回る「毎時10シーベルト以上」

10シーベルトは、短時間浴びても100%の人が死に至る数値とされる7シーベルト（7千³シーベルト）をさらに上回る高濃度の放射線量。同原発では6月に原子炉建屋内で計測された4シーベルト（4千³シーベルト）が過去の最高値だが、それに気づいた記者たちが確認の質問をするまで東電の担当者は、「最高値」であることをなぜか説明しなかった。

また、10シーベルトが東電の計測機の上限であり、実際の数値はもっと高くなることも、後から付け足しのように説明するなど、問題の大きさに比べ、いつものことながら、木で鼻をくくったような会見だった。

木で鼻をくくったように「緊急度は高くない」

2日になって、主排気筒の別の場所でも「10シーベルト以上」の放射線量が確認された。筆者は2日夕方に開かれた東電の会見に参加。「なぜ、もっと国民にわかりやすい説明をしないのか」と、質した。東電からは「事故後の最高値ということには頭が及ばなかった」「周囲の環境には影響が出ておらず、緊急度は高くない」など、なんともものんびりした言葉が返ってきた。

今回の問題で新聞やテレビの扱いは大きかったが、大手メディアの記者たちから、東電の「説明責任」にこだわる質問はついに聞かれなかった。

（かみで・よしき） 北海道新聞で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員など担当。現在フリーランス記者。上智大大学院（新聞学専攻）在学中。